

教育活動全体を考える上で求められる

「カリキュラム・マネジメント」の確立

2015年8月、中央教育審議会教育課程企画特別部会より、次期学習指導要領の検討に向けた「論点整理」が公表された。そこでは、「子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を
実現するために、学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し
改善していくのか」という「カリキュラム・マネジメント」の確立の重要性が示された。

教育改革と向き合う時、 欠くことが出来ない概念

「論点整理」では、思考力・判断力・表現力や情意・態度について、「各教科等の文脈の中で指導される内容事項と関連付けられながら育まれていく」と述べられている。ただし、各教科等で育まれた力を、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てていくためには、総合的観点からの教育課程の構造上の工夫が必要であり、その具体例として、各教科等間の内容事項についての相互の関連付けや、教科横断的な学びを行う「総合的な学習の時間」、そして、社会参画につながる取り組みなどを

行う「特別活動」、高等学校の専門学科における「課題研究」の設定などが挙げられている。

教科学習や「総合的な学習の時間」、特別活動、更にはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）など、それらの各教育活動は、それぞれの学校のSI（スクール・アイデンティティー）と密接に結び付き、その内容や評価方法が確立される。だが、そうした様々な活動の評価や改善の検討は個別に行うだけではなく、教育課程全体でどのような資質・能力を生徒に育成していくのかという観点から、改めてそれぞれの活動で育成する資質・能力を明確化し、教育課程の全体構造とそれぞれの活動を

有機的に組み合わせ、整理していく「カリキュラム・マネジメント」の発想が学校に求められているのだ。

教科や学年を超えて 学校ぐるみで考える

特別活動や「総合的な学習の時間」など、評価の仕組みづくりにおいて現場が課題と感じている教科学習以外の活動についても、「カリキュラム・マネジメント」を通じて、生徒にどのような資質・能力を育むのかを改めて明確にすることで、教科や学年の枠を超えた取り組み、そして適切な評価へと進化していく可能性が高まっていく。もちろん、各校で導入が進む「アクティブ・ラーニング」

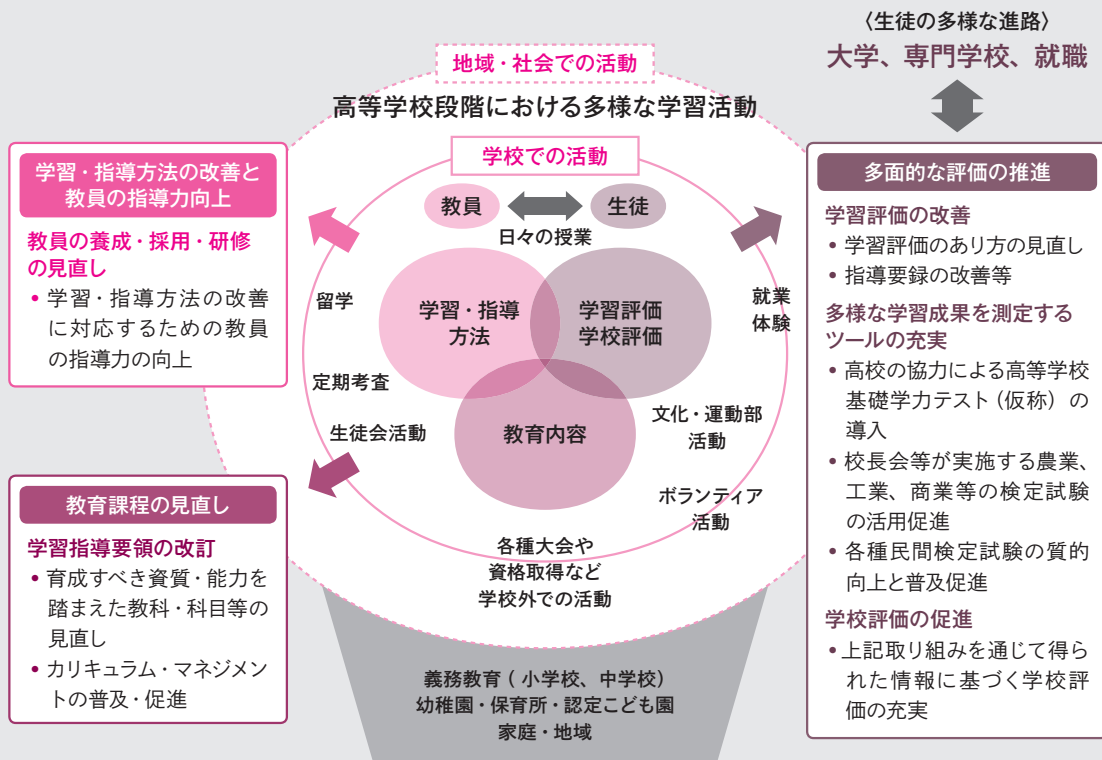
現場が感じる「多面的・総合的評価の課題」

- 特別活動の何をどのように評価していくのが、正直なところあまりイメージが出来ない。
- 特別活動を評価し、それを指導にフィードバックする経験自体が、高校にはほとんどない。
- 各種活動に応じた評価観点シートなどがあればよいのだが、作成に至っていない。
- 各行事が輪切り状態のPDCAになっており、生徒視点でのトータルな資質や能力を育成・チェックすることがあまり意識されていない。

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは2015年10月にウェブとファクスで実施。

図 高等学校教育の質の確保・向上に向けた全体的な取り組みについて（案）

～ICT活用を始めとする様々な教育活動を通じ、生徒の主体的・協働的な学習の確立を目指す～



*高大接続システム改革会議「中間まとめ」（2015年9月公表）別添資料を基に編集部で作成

次ページからは、「総合的な学習の時間」の改善に臨む高校の校内検討会の模様を紹介する。

次ページからは、「カリキュラム・マネジメント」を確立する上で求められる観点を踏まえた教育活動の実践として、2校の事例を紹介。更に、「カリキュラム・マネジメント」を実践していく上で不可欠な「学校ぐるみ」の雰囲気や校内に醸成しながら、「総合的な学習の時間」の改善に臨む高校の校内検討会の模様を紹介する。

についても、学校や地域の特性と深くかかわる以上、学年や教科の枠を超えた「カリキュラム・マネジメント」の観点からの検討も重要であろう。同時に、生徒や地域の状況を適切に把握するためには、学校ぐるみでの調査・分析も欠かせない。

そうした「カリキュラム・マネジメント」は、教育課程、学習・指導方法、評価方法の3つを校内で継続的に見直し、改善していくために必要な概念であり、全ての高校で求められるものだ(図)。また、教育活動全体の見直し・改善に向けた検討は、管理職のみならず、全ての教師、更には保護者や地域社会なども巻き込み、それぞれの視点を有機的に結び付けながら取り組む必要がある。同時に、自分の教科や分掌などにとらわれず、「学校本位」という視点で教

育活動全体を見るような学校文化を校内に根付かせることも重要だろう。

そして、「カリキュラム・マネジメント」の観点による教育課程の見直しと改善は、大学入試改革とも密接に関連している。大学入試において、「学力の3要素」を適切に評価するために、特に個別試験における多面的・総合的評価を行う仕組みづくりが各大学で進められている。その際、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の結果を始め、ボランティアや部活動などの活動報告書、各種大会の記録など、様々な角度から「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価していくことになる。したがって、「カリキュラム・マネジメント」の確立は、生徒の未来を保証するためにも必要不可欠と言えるだろう。